

土のう見学 レポート

京都大学 医学部 人間健康科学科
看護学専攻 4 回生
尾白 有加

私たちが、見学に行くと、20～30人程の人々が、道造りに汗を流していました。学校に通っている小学生を除き、村中の、子どもからお年寄りの人まで動ける人はみな集まって、でこぼこの道を直していくそうです。リーダーを中心に住民がみな一致団結して、道造りという1つの目標に取り組んでいました。また、道造りに必要な材料は、現地で調達できるものばかりで、かつ作業は、高度な技術や知識を必要としない、すごく簡単なものでした。道造りと聞くと、力仕事で女性にはキツイ作業だと思ってしまうのですが、ここでは、様々な工夫がなされており、どのような人でも作業をすることができていました。このように、自分たちの生活範囲内にあるもので、道造りをするができるため、そして、男性だけではなく子どもや女性でもできる作業があるため、コミュニティの住民全員で自分たちの道を作ることができるのです。この道造りを通じて、ケニアの農村におけるコミュニティのつながりの強さをすごく感じました。

また、みんなすごく楽しそうに作業をしていたのがとても印象的です。やらされている感など全くなく、住民が自ら進んで道造りを行っていました。

道造りをすることによって、自分たちが作った農作物を市場へ運べるようになることはもちろん、子どもたちが学校にも通いやすくなります。このように道を作ることによって生じるメリットがはっきりとしているため、コミュニティの人々は一致団結して、前向きに道造りをし続けることができるのだと感じました。

1つ道が完成し、その完成した道のすばらしさを住民自らが肌で感じることによって、道造りに対して自信を持つことができ、また、さらなる道造りを進めていこうという行動力につながっていきます。そして、この道造りをきっかけに、その他の面においてもコミュニティの住民自らが行動を起こし、自分たちの生活をよりよくしようという意識を持ち、行動に移していけば、今までよりもさらに豊かで幸せな生活が送れるようになると思います。

このように、ケニアの農村において、コミュニティのパワー溢れる活動を見学させて頂くことによって、私自身パワーをもらった気がします。

本当にありがとうございました。